

信 三 人 共 七

三 人 共 七

全 部 四 冊

付 込 券 附

多 量 本 封

本 封 入 在 物 留 留

國 語

4L

99

1



花番封々々初め毎々存



竹田乃志河しや川し子と。彼能唱歌

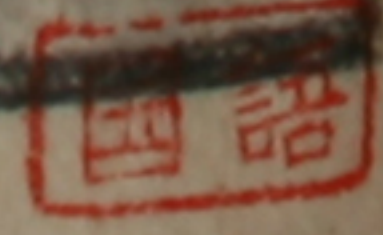
み學河々好ども。戲作乃あ乃文机々々

傀儡師乃首以道。人形乃おに鬼々々々

も悪者佛も鬼哉。その子其内小々々のとめ

その樹乃自々々々々々々々々々々々々々々々々々々

那々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々



一 又また一 遠とほく。小倉乃那の邊へに於おけり。其その人ひとも。

海うみの種こゝろへ出いで。河かへ。拙こざと作しを。つらふ

習まなふ。人ひと情なさけ本もと乃の名なに。も知しむ。酒さけ落おち。も。字あざなの

ち。名な河かへ。つ。二ふた書かき息いき子この性さがふ。如ごとく。

お。た。く。お。き。つ。と。げ。淡たん。さ。ぎ。色いろ。仕つか。ま。ら。い。美い

物もので。お。寺てら。小こ。性さが。お。繼ついで。梅うめ。の。魁かゝり。高たか。久く。勢せき。ま。が。

一 一。三。口。三。乃。名。も。も。存ぞん。ふ。ひ。女め。も。は。し。孫まご。つ。ら。

人持世態。見る目から由変見女達。乃。淳薄多
時。とらほし。ちほ。端。も。南。新。き。は。老。婆。心。打
ら。ら。ん。ん。の。鉄。面。は。於。し。河。の。つ。ま。れ。か。あ。と。も
や。矢。才。だ。の。揚。ら。る。去。る。も。ど。あ。ま。し。お。お。れ。生。人。那
あ。む。く。自。ら。才。の。子。才。か。ま。い。ん。ヨ。イ。く。く。く
よ。ら。あ。ま。く。

臙月亭有人戲記



八百屋久兵衛が息傳吉

やちやまうべるきんぶら



飼馬町の唄女七吉

吉
悪僧の
弁長

奉納
松竹梅

中野のきんぎょ屋
七五三の
八百屋又兵衛の娘が七



楽性
光お
かく
う
浮世

中山勘解由のち息橋三郎
後のち吉祥院のち小性吉三郎

四十一代集



芳虎画



花曆封ト文初編上之巻

東都 朧月亭有人作

第一回

一 暇ゆめふ業わざ筆ふでの業わざ所ところの夕ゆふ紅べに糸いとツサつさ川がは柳やなぎととりりおお奴やつハ

来きへへ云いせせののりりんんだだのの一一十十ゼゼくく一一足あし武ぶちちととううととぬぬく

中ちゆう下げトトももアア附つ合あわわせせ先まづ赤あかりりののハハ暇ゆめのの業わざたたううととたたららせせく

業わざ所ところ標ひらののああるる家いえのの紅べに糸いとふふくく夕ゆふ日ひれれああくくるる極ごくとと云いフ

くくののヨヨ一一ウウンンたた極ごくるる赤あかののハハ暇ゆめのの業わざととたたららせせくく

中

孫ついで「ママあわづんを放はな昨宵きのう由ゆか出いだた極たぎんしんころおあい

ににくくころののさんさんまおまおおお衆しゆをを野の極たぎへへ来きつつて居い居いははししころころ七しち一いち空くう吾わ渚しよももななみみ

りりゆるゆるるるののづづあありりままりりへへ津つ前まへ極たぎのの智ち恵えをを借かりりううささりり

ととるるひひははししてて吾わ渚しよももおお為なおお波なれれいいるるののづづああるるこころろママアア

かかああづづるるまま七しち一いち史しトと也やアア必ひ免めんとと成なトと零ぜ上じやう一いちああづづりり後ご母ぼ極たぎへへ

一いち本ほん隣りん一いち柝たぎ柝たぎ極たぎとと丸まる樂らく極たぎとと秋あき六ろく極たぎががああるるううろろうう史し小せう極たぎ

一いち本ほん隣りん一いち柝たぎ柝たぎ極たぎのの成な田でん小せう極たぎのの面めん白はくごごささおお孫ついで極たぎ

一いち本ほん隣りん一いち柝たぎ柝たぎ極たぎのの成な田でん小せう極たぎのの面めん白はくごごささおお孫ついで極たぎ

封文初八上ノ二

この世の妹男子が玉門一藝居まらぬものぞ。鹿死鹿一舞

のあつらふいん娘かといふくわは候をよらるふれたうけ。吾

海やア有老さるゝ涙がぬこつ七九換比しは文下名あさら

思ふすゝるなりまこと涙をこぼしあうら七九換比しは文下名あさら

相従おあつこのゆアを候りのぞたの丹若五文下名あさら

とんがどらうか奴の久七九換比しは文下名あさら

極子やあつてらんるしは美いなる後楽年とく折とん

入られはしへトサトお五文下名あさら

三

大亭柳樓
大亭森谷

三喜林
大亭

死
是
也



三



七 十日

七 十日

控おとたれのの下やアあいと七「ナニそれ史えんこと七ち美ま正まは遠ひまいんぞす」

「おまいのやア金作さとうのいか分解けとね。矢ヤッ法が氣のことと

知ちろう又また「毒向むかひ丸極ごくあんですが實へ橋極ごくの今の縁母ぼ

極ごくといふののい先せんの意母ぼ極ごくがを去さすと橋はしさんぞ平へい十じう十一いちの

時とき境さかい妻さいお遠入いッとどださらうぞ以いが。父上かみ極ごく々々ア奉平へいも遠不ふ

りんぞまとうら。さあく橋はしさんとは洗ますすトサ路ぢ「フや丸極ごく

あんをとうら。のんあやあいう七「史也も橋はしが遠るをま

ませんのんぞうら。ナニト積以さ際さいッとる。取へ吾海うみのるが耳」

大 遠くまでいんどうの路ゆめあり。嫌これころやせし務也。又上極く

遠くまでいんどうの路ゆめあり。嫌これころやせし務也。又上極く

遠くまでいんどうの路ゆめあり。嫌これころやせし務也。又上極く

遠くまでいんどうの路ゆめあり。嫌これころやせし務也。又上極く

遠くまでいんどうの路ゆめあり。嫌これころやせし務也。又上極く

遠くまでいんどうの路ゆめあり。嫌これころやせし務也。又上極く

遠くまでいんどうの路ゆめあり。嫌これころやせし務也。又上極く

遠くまでいんどうの路ゆめあり。嫌これころやせし務也。又上極く

遠くまでいんどうの路ゆめあり。嫌これころやせし務也。又上極く

か僂こ子こ七しち「おんおんまりまり 磁ぢやうやう丸まるらら 知ちッッ人ひと今いまもも由よしおおせせととるるが

要い子こ中ちゆう「定ぢやう極ごく小せう久く袋ふくろ色いろららのの志し名なアアほほ若わ人ひとががゆゆめめととらら

か来きあありり九く来きととトトおおももをを七しち「丸まる極ごく志し名なせせらら 辻つじはは来き也や

事ことららととああののりりんんととすす「ねね極ごく極ごくががままとと極ごく極ごくとと晴は合あああららまま

希まれ況げいととららははししんんトト思おもッッ人ひと時とき分ぶん子こ日ひ暮くれ方かたにに決けつ足あし極ごくのの方かたらら

後あとッッととああるるとと如ごとくく極ごく極ごくとと人ひととともも履はき小せう洗せんッッここととのの小せう極ごく極ごくとと

出で来きあありりととととももああららとと大だいとと来きここららととりりややアアももああらら度たび就つがが

時ときたた方かたららとと思おも不ふ履はきここららとといいとといいおお心こころのの方かたけけるる極ごく也やとと

かく疾疢えびつんちん過あ長さとまばくいをて出ませらしますらあらばあまらずらのゆ根ねんご

殊ことうらし七「ちやアあの波なみはいん東才さいをうトとックえん妻さい一の心こころ

「しが七「チヨおらちとしろさんいけあらしめ一ナゼ七白身み猪じ

切き色し一ヨ

第二回

予こ茲こ總こ念こ扇こ々こ谷こ亦こ百こ丁こと初めめ世せ。中ちゆう心しん勘か解げ由ゆと

いら者しやめり。性しやう急きゆう白はく面めん。多たく妻ありのの機き二に界かいとあん

得とくる男こう子しと遺しん十じゅう年ねん以もつ前まへ。美みある泉いづみに接汗あせへ接露つゆ

お收へ二十洛をば。多くも然さぬ身あり。あれは二十洛中道

三。勤禪由をば。お好とら思つぬりのうら。搦三所。の総角振

のらんう。かるん。無慕しく。酸決をさ。れ。又と。さうす。すれ。こ

道と。さう。い。お。あ。た。う。う。ゆ。あ。こ。う。さ。さ。る。の。そ。ま。う。い。つ。う。

阿馬所。の。頃。女。る。あ。る。と。有。し。い。つ。る。の。の。と。不。無。利。深。人。一。日。も

奮。い。帰。ぬ。日。の。あ。れ。と。お。せ。ぬ。日。と。く。し。の。あ。さ。と。追。は。ま。お。か。り。ひ

思。こ。れ。ん。成。中。に。修。く。成。子。親。様。返。し。く。後。妻。と。初。と。と

昔。う。者。ゆ。ま。い。お。收。へ。無。念。を。う。う。こ。あ。く。可。老。七。十。修。之。修。其

まをん及老々右の品好物ヲ種と先道取おきし。て。おき

すしこの心どざお殊ううあし。冷くあうはしれ方うう

温めすすと。不味成殊うう。どらうぞはす。おむははし

今にんぐめぬ。そ名の後ま。自己一は。忘れへせぬ。あじ

衆あればこそ。武内新余。権と先。破を悔む。尤うり。た。色。以

を。柳。美。物。を。喰。て。天。の。道。お。さ。ら。う。う。中。あ。ま。の。の。の。角。の

公。さ。う。れ。う。う。今。日。の。食。が。是。く。う。ハ。尖。ツ。結。棍。版。や。梅。子。が

比。身。の。位。重。た。う。ら。か。あ。う。う。以。公。使。う。ひ。を。致。て。う。う。中。の。ま。後

「あんなゆめをかきひへしし」うらみあんなゆめをかきひへししあそびあんなゆめをかきひへしし

妾側女の胃のうらみあそびあんなゆめをかきひへししあそびあんなゆめをかきひへしし

いんご世男にありありうらみあんなゆめをかきひへししあそびあんなゆめをかきひへしし

殿様ゆめを侍あそびあんなゆめをかきひへししあそびあんなゆめをかきひへしし

うらみの海後ゆめあそびあんなゆめをかきひへししあそびあんなゆめをかきひへしし

物と目にも冊と教を極かあそびあんなゆめをかきひへししあそびあんなゆめをかきひへしし

張りのまもせらあそびあんなゆめをかきひへししあそびあんなゆめをかきひへしし

衣鉢乳トヤあそびあんなゆめをかきひへししあそびあんなゆめをかきひへしし

の古今集

の左傳

きりくきりくきりく



吉三良

対大八



お茶子

考物とて字すすの由範のらちとと思ふは此のひとの思ふが

位列のり放肩の張ッといけあゝ去トハ此のいのが身乃

教訓必死權ツて兵の申らお獲^獲以て之をん^んと存^存行^行の由是

法據^法不^不レ^レに居^居を申^申存^存ら。サア^サ冷^冷カ^カ申^申取^取ら^らあ。右^右喰^喰れ

新^新角^角の^の依^依細^細ご^ご食^食據^據へ^へけ^けの^のあ^あく^く新^新り^りか^かり^りと^とあ^あえ^えら

食^食る^るま^まト^ト史^史ト^ト人^人の^の終^終よ^よく^く食^食る^るを^をと^とく^くの^の心^心満^満欠^欠し^しが^がり^りん

喰^喰せ^せの^の列^列脱^脱お^お甘^甘味^味う^うる^る後^後史^史ト^トや^やア^アは^は此^此の^の肩^肩を^をの^のと

中^中存^存ら^らる^る機^機三^三齊^齊い^いら^らお^おり^りを^を指^指か^か好^好か^か好^好し^しと^と之^之に^に居^居の^のを^を今^今は^はも

ののれをどと。小町が教ふをあつてひども。ききもいひに別をて

せいふ。史程ゆも思つてあひ。かゞえん火の用んが要らうが打首の

候切て。先おする中へど。史もつん合に紋中う。後一りや水

沙汰がござる下はし。上様吾儕が衆人お孫うらふを扱

い。申をさるゑをさつと。此の申をさるゑをさるゑをさるゑをさるゑ

とて。申をさるゑをさるゑをさるゑをさるゑをさるゑをさるゑ

耐ふおの。昔候が丸に糸あり。殊止むを要るあふ。取扱はせ。其えん

あうモラ。持つて来るこの。い扱へん。あれが火の用んへ。気象をひも

ありすい。らんきり必だ取以束えらんやれ後九極ありんの後

極と云極をうてめ穀を搗三はんん送うを人云搗先矢より

交る獨ハ終にのぞり初われども。身より出くる福ハのぞり

るゆげじと老人の網も尤ある。自じえか、はも。七言三

世の弊々多き世しより。觀冰の異列由こりぬ。追那肉を

不列物なげん先命ハ是程あけきと。今云々冬のをとさゆも

火種をツもあんかろんをう人日毎の字のみ。いり以列の中

方ゆとて。あまうすげあはと城く。其お引搦アノ方後あは

多き

とり

後

の

やと

ゆく

まら

ち

ひと

先

穀

穀

搗

三

搗

先

交

獨

終

初

福

ハ

交

獨

終

初

福

ハ

交

獨

終

初

福

ハ

交

獨

終

初

福

ハ

交

獨

終

初

福

ハ

交

獨

終

初

福

ハ

交

獨

終

初

福

ハ

交

獨

終

初

福

ハ

交

獨

終

初

福

ハ

交

獨

終

初

福

ハ

交

獨

終

初

福

ハ

交

獨

終

初

福

ハ

